BOOK GUIDE

今月のブックガイド

はい。赤ちゃん相談室、田尻です。

こうのとりのゆりかご・24 時間
SOS 赤ちゃん電話相談室の現場

田尻由貴子著
ミネルヴァ書房
定価 1,800 円＋税

“生きる、学ぶ、働く姿”からの発信

「赤ちゃんポスト」のニュースが世間を騒がせたのは、2007 年 5 月のこと。あれから 9 年半が経つものの、当時の衝撃の大きさは忘れられない。熊本県の慈恵病院の取り組みであり、親が育てられない乳児を匿名で保護するこのシステムの名称は「こうのとりのゆりかご」というが、通称として普及した「赤ちゃんポスト」の響きの“軽さ”もあってか、当時は「育児放棄を助長する」「親が子どもを捨てるなんて」「のちに捨てられたと知った子どもが悩むはず」といった批判や疑問の声が多く寄せられた。いわば、社会から温かく歓迎されたとはいえない出自をもつ「こうのとりのゆりかご」誕生の経緯とその後の活動について、同病院の看護部長として運営の中心的役割を担っていた田尻由貴子氏が綴っている。

慈恵病院の前身であった宣教師によるカトリック教会では、当時、裏手の寺に集まっていたハンセン病患者の救済にあたり、フランシスコ修道会から派遣されたシスターによって、自然と乳児院としての役割も担うようになったという。こうした同病院の歴史や使命も、遺児を救いたいという願いの実現化に深く関わっていたと思われる。

それでも、医療従事者にとって、この選択は決して容易なものではなかったはずだ。大きな葛藤のなかで、それでも赤ちゃんの命を全力で守ることを決意する。そして、そのまなざしの先には、つねに、不安や戸惑いを感じ、孤立している母親の姿がある。「こうのとりのゆりかご」には、母親へメッセージを届ける工夫がこらされている。赤ちゃんを死なさずに連れてきた母親を待ち、受け止めようとする。これはギリギリのところで精一杯の選択をした母親への支援なのだ。事実、この運用が開始されてから、保護した子どもの人数（8 年間で 112 名）が減少しつつあるのに対し、妊娠や子育てに悩む女性からの相談件数は急増しているという。小学生の妊婦から、子どもの妊娠を知らされた親世代まで、幅広い女性たちの受け皿として機能している。しかし、残念ながら、こうした窓口は全国で不足しているのが実情である。

こうした取り組みの経緯や現状も興味深いものだが、本書の魅力は、著者自身の生い立ち、そして幅広い活動やキャリアを可能にした一女性のパワフルな生きざまにもある。

終戦から 5 年、豊かさのかけらもなかったという小さな田舎町で生まれた著者は、中学卒業後、慈恵病院が運営する全寮制の准看護学校に進学する。高校の通信教育を受けながら、「うれしくてたまらなかった」という筆者。その後も意欲的に勉学に励み、シスターや仲間、きょうだいの支えを得て、正看護師と保健師、助産師の資格をとる。新設の保健管理センターではさまざまな企画を立て、異動した病院では総婦長として訪問看護のプロジェクトにも関与。どんなときでも、筆者の学び方・働き方がとにかく生真面目なのだ。例えば、総婦長を引き受ければ、病院内のあらゆる病棟で、夜勤も体験しながら、現状を把握しようとする。「スタッフと同じ目線に立つ」「現場をしっかり自分の目で見る」というのが徹底されている。その後、社会福祉士の資格も取り、児童養護施設での研修経験のなかで社会的養護の限界を実感したことが、再び戻ってきた慈恵病院での「こうのとりのゆりかご」と特別養子縁組の取り組みを推進させていく力となる。

田尻氏の“生きる・学ぶ・働く姿”から気づかされるのは、どんなときにも現場を自分の目で見て、仲間とつながることの大切さである。不安を抱えた母親の目には、“生きる支援者の姿”が映っている。支援者がどう学び、どう働いているのか。「はい。田尻です。」と自信をもって名乗れるような仕事ができているか――それが問われていると感じた。（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）